

Title	天文逸話二題
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1941), 21(238): 118-118
Issue Date	1941-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/168153
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

れば門傾く、兄妹提灯を手にして積雪の中を求むるに門内中庭の踏石の上に異様の石塊を發見せりと。

實物は茶褐色で、一小部分を毀ちたるに粒狀のもの満つ。

又、護國神社々頭に、昭和12年冬、一大音響と共に落下したる隕石坑を視た。此の神社の境内は、生田家の所有であつたといふ。サダ女史は生田家と隕石と何等かの因縁ありと思惟せられて居る。

6. 結 言

以上は、筆者が尼崎市立商業學校生徒に通俗講演として駄辯を弄したものに過ぎぬ。又、其の梗概は二三の新聞、雑誌に通俗讀物として掲げられたものである。主觀的に客觀的に記述して、甚だしく冗長に、諄々しい。會員各位の一讀を賜はる價值を認めない。唯筆者は近時「俯して天體を視る」に轉向し、且、又、Historical Researches of Science の方角へも向ひ、それを目標にあらゆる口碑傳説を蒐集し、筐底に忘れられたる廢物を採し求め、時局柄、有効に之を活用せんと考へてゐる。かくて、新體制に順應すべき何物かを獲たいと念じてゐる。

天文逸話二題

「ねえ、プラトヘ行くことにしよう。」「まあ、何を仰有るの？ お金にするものは何も無いぢやありませんか。」これは、中世に於て、後に其の名を謳はれた大天文學者ヨハネス・ケブラの負笈遊學前の夫婦の會話である。夢見るやうな近眼で、妻を見遣り乍ら、彼はティヒ・プラトヘ大先生に火星の觀測數値を教示願はうとて、發足しようとするのである。

然し、プラトヘに師事してから、師に對し不幸な誤解を起すやうになり、ケブラは師に失禮極まる手紙を書いて、憤然プラトヘを去つたのである。

× × × × ×

バド・ヴの哲學の主任教授は、ガリレオの望遠鏡を覗くことを絶対に拒絶した。ピアの哲學教授は大公の前で、論理的證明を振ひ「衛星は肉眼で見える。だが、地球に何の力をも及ぼさない。だから衛星は無用なものだ。だから衛星は存在しない」と、巧みに舌の先で衛星を天空から掻き消して了つた。

1610年一月12日、小さな星が木星の右に3つ、左に1つ見えた。之れこそ、ガリレオの木星衛星の發見である。最近には、1938年七月6日、米國ウエルソン山天文臺のニコルソン博士に依つて木星の新衛星が2つ發見され、土星を抜いて11箇の子福長者になつて居る。